

イチゴ「女峰」における本圃増殖法の適用性

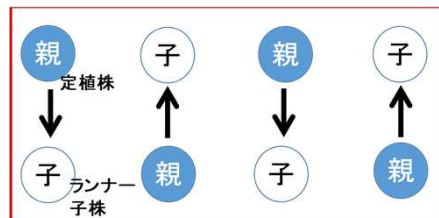
野菜・花き部門

井口 工

イチゴでは、9cmポットで育てた苗の花芽分化を確認し、9月中旬に定植する作型(促成栽培)が一般的です。しかし、その苗を確保するための育苗作業は、前作の作業管理と重複し、最も暑い時期の作業となることから省力化が望まれています。

そこで、県内で栽培される「女峰」のピートバッグ培地での本圃増殖法の適用性を検討しました。なお、この技術は「さぬき姫」で開発され、普及が始まっています。

本圃増殖法とは？



ピートバッグ2倍定植の例

7月下旬頃に苗(親株)を本圃へ定植し、その親株から発生するランナー子株を随時、培地上に配置して、定植する方法です。育苗の省力化や炭疽病のリスクが大幅に下がるなどのメリットがあります。

本圃増殖の頂果房開花日は、ポット促成(慣行)より5日程度遅れましたが、本圃増殖での親株定植時期の違いで、開花日に差はありません。

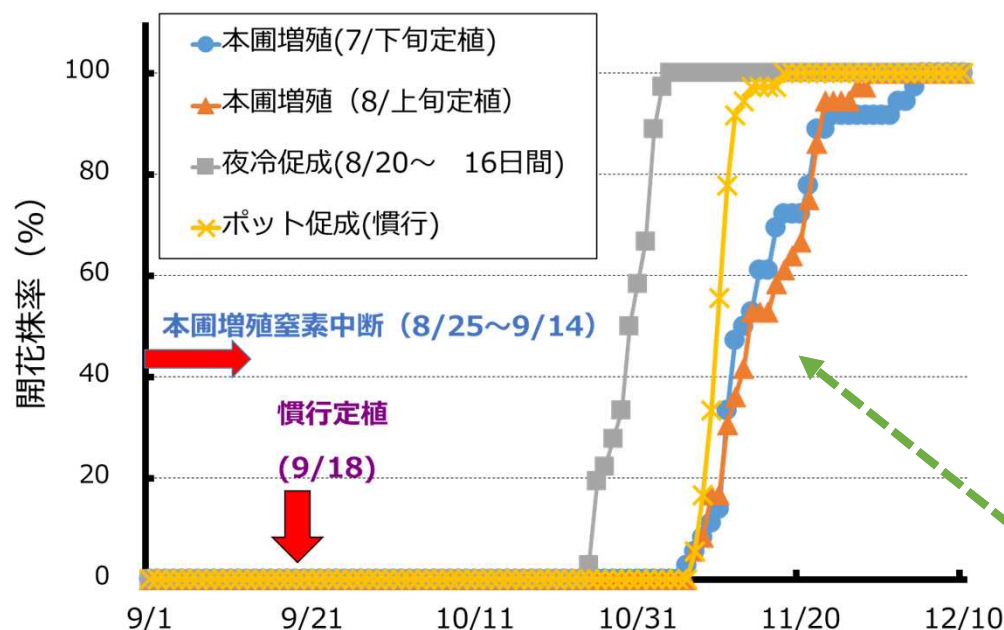
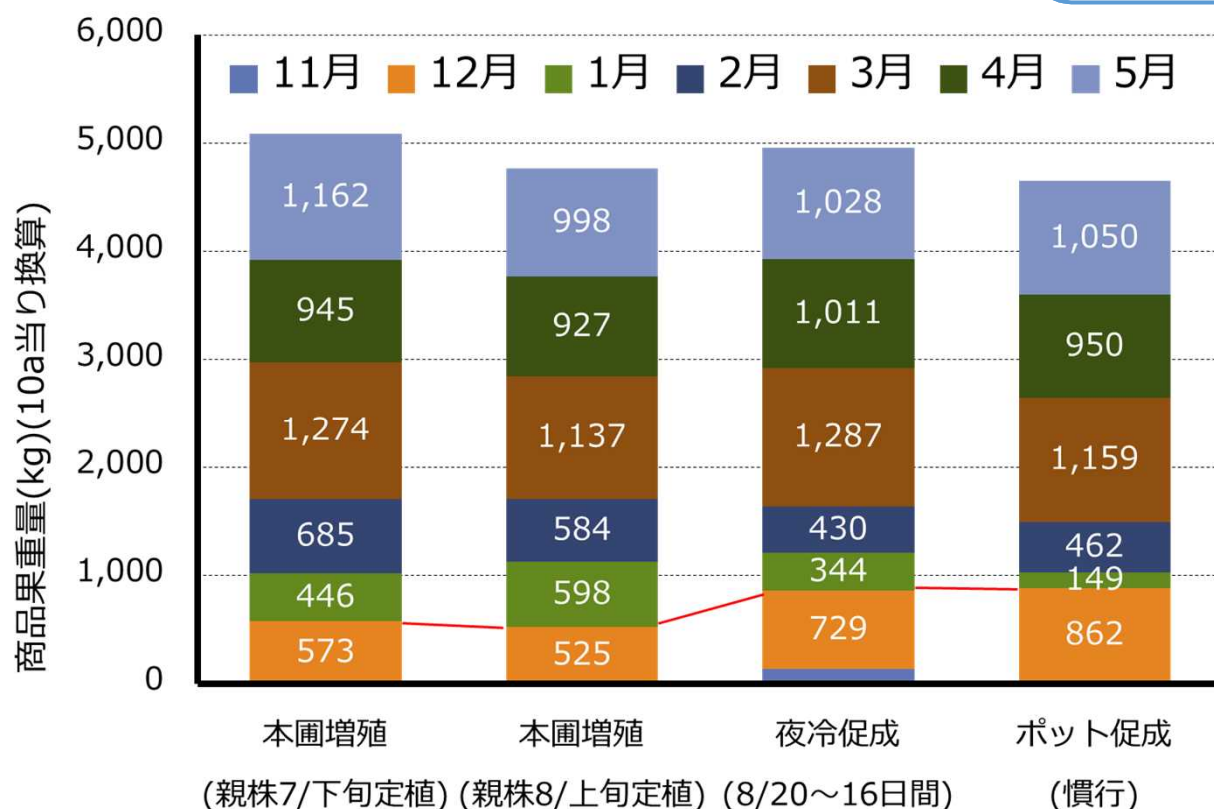


図 本圃増殖における開花日、慣行区との差



年内の収量は慣行区の6割程度ですが、1月、2月の収量の落ち込みが少なく、慣行区と同等の収穫量が確保できます。

図 本圃増殖の商品果収量、慣行区との比較